

# 鳥海イヌワシみらい館通信

Vol,25 2018年 新年号



鳥海イヌワシみらい館  
マスコットキャラクター  
「ワッシーくん」



バードウォッチングへの誘い②⑤「オオタカ」が指定解除になつたって？②  
突撃！鳥海イヌワシみらい館。ネイチャーカハラマン太田威氏  
インターンシップレポート 岩手大学農学部 森航大さん  
蜂蜜の森から③「蜜ろうそくは森のともしび」

「クマタカ」酒田市、撮影：長船裕紀

## バードウォッチングへの誘い②

# 「オオタカ」が指定解除になったって？②

昔から日本では単に「鷹」といえばオオタカを指したほど猛禽類の代表ともいえる種。そのオオタカが2017年9月21日に「国内希少野生動植物種の指定解除」となり、ニュースなどでも大きく報じられました。指定種解除はルリカケスに続いて国内2例目です。前回、オオタカが指定種解除に至るまでの経緯を解説しましたが、今回は希少種指定解除によってどのような問題があるのかを見ていきます。(参考文献:日本のワシタカ類 環境省レッドデータブック)



長い尾羽と幅広な翼は、狭い森林で急旋回、急ブレーキをするのに適応した形態

和名 オオタカ  
学名 *Accipiter gentilis*  
翼開長 106～131cm  
体長 47～57cm  
体重 550～1000g

## 「国内希少野生動植物種指定解除」によって懸念される問題

### ●誰でも捕獲、飼育が可能になる？ 駆除対象種に？ ●



●「鳥獣保護管理法」「ワシントン条約」があります！ ●

鳥獣保護管理法によって狩猟が可能となるのは、「狩猟鳥獣」に指定されている種のみです。オオタカは狩猟鳥獣に指定されていませんので、これまで同様に捕獲・飼育・狩猟はできません。また、オオタカはワシントン条約付属書Ⅱ掲載種であり、輸出入は規制されています。



### ●オオタカがいても開発できちゃう？ ●

あ、オオタカだ！



●「環境影響評価法」があります！ ●

これまで通り、直ちに開発が進むことはありません。大規模な開発には調査が義務付けられています。

自治体による条例やレッドリストが策定されています。また、「猛禽類保護の進め方」を活用して、影響のない仕組みを検討していくことにしています。

### ●「里地里山保全活用行動計画」●

里地里山の生物多様性の保全と持続可能な利用に向け、里地里山の保全活用を全国展開するための実行計画として平成22年に環境省により策定されました。里地里山の自然資源や生態系サービスを多様な主体が共有の資源として利用・管理する枠組みの構築に向けた自治体向けの手引書です。この計画に基づいた取組を促進するための手法として、地域や活動団体の参考となる里地里山の特徴的な取組事例の情報発信を行っています。現在、環境省では生物多様性保全上の観点から全国レベルで重要な里地里山の抽出を進めており、抽出された重要里地里山は、その重要性を全国に公表し、保全活用に対する理解を促進したり、各地域での保全活用に関する取組を促進・拡大したりする予定です。

オオタカが国内希少野生動植物種の指定解除となりましたが、これまでも法律によってオオタカの生息地が開発から免れていたわけではありません。国民一人一人がオオタカの自然環境における重要性を認識していたからこそ、オオタカの生息地が守られてきました。重要で保護されるべき種であることはこれまでどおり変わることはありません。環境省では個体数が減少し、レッドリストカテゴリーが「絶滅危惧種」となった場合は、国内希少野生動植物種へ速やかに再指定することを検討しています。しかし、最も大切なことは**二度とオオタカが絶滅危惧種に指定されるようなことがないように**すること。皆さんもオオタカを見守って行きましょう。

# 庄内の動物情報コーナー

今年の秋は帰りの道路でマムシによく会いました。猛禽類ではフクロウも良く見るのですが、当センターの見晴らしの良い園地を利用して狩りをしているようです。ツルの飛来情報があったりもしましたが、ほかの地域ではどうだったのか環境変化等にお気づきになりましたら moukin@raptor-c.comまで投稿ください。



2017/11/23「ズグロカモメ」酒田市  
東北地方ではめったに出会うことができないズグロカモメ。頭黒くない…。夏は頭が真っ黒ですが、冬になると真っ白になるんです。カモメの中でも小さい仲間で絶滅危惧Ⅱ類。冬鳥として大陸からやってきます。  
撮影：佐々木真一様



2017/11/27「コムズク」鶴岡市  
冬にわたってくるフクロウの仲間。基本は夜行性ですが、明るいうちから活動していますので、ある程度広い草原のある環境に行ったら探してみてください。  
撮影：佐々木真一様



2017/11/27「ハヤブサ」酒田市  
鳥海山をバックにカモを仕留めたハヤブサの様子。この後、仲間のカモがハヤブサにアタックして捕まえられたカモは助かったのだとか。  
撮影：佐藤忠昭様



2017/12/4「オオカマキリの卵」酒田市  
「今年のカマキリ積雪予報をお伝えます。酒田市八幡地域では約1mの積雪がある見込みです。」当たりましたか？  
撮影：池田久浩様



番外編 2017/12月「チュウヒ」新潟県五泉市  
全国的に消失傾向にある川沿いのヨシ原に生息。最も私たちの身近に暮らす絶滅危惧種といってもいいかもしれません。  
撮影：波多敏雄様



番外編 2017/11/12「オジロワシ」秋田県大館市  
ハクチョウ観察の帰りに遭遇したそうです。大きいワシが飛んできたので驚いたことでしょう。  
撮影：山島猛様



番外編 2017/11/19「コバネイナゴ」秋田県にかほ市  
イナゴって全体が緑色のはずですがなぜか赤いラインが入った個体を見つけたので投稿してくれました。なんかちょっとカッコ良く見えてきた！  
撮影：後藤勇様



番外編 2017/12/10「ミサゴ」神奈川県  
翼が異様に長く見えるこの猛禽類はミサゴ。餌は足にしっかりとつかんでいる魚ですが、大きいものでは自分の体と同じくらいの大物を捕まえることもあります！  
撮影：こまたん 金子様



番外編 2017/12/16「メジロ」神奈川県  
カラスザンショウを食らうメジロ。きれいなグリーンを見ると春が来たという感じがしますね。え？雪の積もらないところでは冬でも見られるんですか？  
撮影：こまたん 金子様

## 突撃！鳥海イヌワシみらい館⑦



### ネイチャーカメラマン太田威さんに聞く！

おおた たけし

「トチノキ」  
撮影：太田威

あけましておめでとうございます。山形県内のその道のプロに教を乞う「突撃！鳥海イヌワシみらい館」のコーナーの7回目。今回は鶴岡市在住のネイチャーカメラマン 太田威さんにお話を伺ってきました。

～心が動くような出合いを自然の中でしてほしい～

**本問) 太田さんは生まれも育ちも鶴岡市大山ですか？**

太田) 中国満州生まれです。2歳に引き上げて父親の実家のあるここ大山に移り住みました。当時は栄養失調で何度か死にかけました。

**本) 写真撮影を始めたきっかけはどんなことですか？**

太田) 上池のすぐ近くに住んでいたの、小さいころから周辺の自然の中で遊びまわっていました。自然の中で一生の仕事をしていきたいと考えていました。37歳で脱サラし、撮影した写真をもって東京の出版社に売り込みに行きました。私の写真から都会に住む人たちに自然の素晴らしさを紹介していこうという思いがありました。志がなければ続けていくことはできない仕事だと思っています。

**本) カメラマンの傍ら自然保護活動にも力を入れて行っていますが、どのようなことがあったのでしょうか。**

太田) 1970年代のことですが、山形県の朝日連峰をセスナに乗って上空から見ました。ブナの原生林にブルドーザーの跡がつけられ、網の目状に伐採されている状況を目の当たりにし、拡大造林事業の愚かさ気づかされました。それが山形県だけでなく全国規模で行われていたのですから、このままでは日本の環境がどうにかなってしまうのではないかという思いに駆られ、保護活動をしていくことにしたのです。朝日連峰のほか白神山地、宮城県や秋田県などでも保護活動に身を投じました。



山形県朝日連峰 拡大造林事業地で網の目に走る林業道路  
1980年、上空より撮影 太田威

**本) 大山上池・下池・高館山の魅力はなんでしょうか？**

太田) 生物の宝庫であること。その生物たちが四季を通して変化していることがまた面白いところですね。こういう自然が他にも多く点在していることが理想なのですがね。

**本) 2008年に大山上池・下池のラムサール条約登録にも尽力されましたが、登録されて良かったことはありますか？**

太田) 自然の素晴らしさを多くの人に知ってもらうきっかけになりました。

**本) 逆に問題点はありますか？**

太田) カメラマンが多くなってしまいました。県外から大挙してやってくることもあり、鳥たちに対して観察圧が大きくなっていると思います。私たちのルールでは、巣には近づかないなど配慮をしながら撮影しているのですが、そうしたカメラマンの中には、被写体はどんなにでも、自分たちが写真をとることができればそれでよいと考えている人たちも多いように感じます。撮影する側には、しっかり被写体である鳥や植物の生態を理解したうえで撮影にあたっていただきたいと思っています。カメラなどの機材も便利になりました。デジタル化によってすべて機械が調整を行ってくれることで、撮影する技術やメカニズムについてあまり考えなくなったことに加え、1枚のシャッターを切るという行為にかかる思いが大分薄まってしまっていると思います。カメラメーカーも売ればそれでよいという、社会的な責任を考えているのかどうか疑問に思うこともあります。植物の愛好家による山野草の盗掘も問題です。

**本) ラムサール条約湿地を利用する人たちへ一言。**

太田) 生態系に悪影響を与えないでマナーを守って接してほしいです。人間が一番であるという思いは捨ててください。



2018年にラムサール条約登録10周年を迎える上池。高館山が奥にそびえ、冬の日本海から吹き降ろす冷たい風を遮る。

**本) 太田さんは様々なイベントで講師としても活躍されていますが、どのようなことを念頭にして活動しているのですか？**

太田) 自然を感じるということを大事にしています。私の自然に対する考えを押し付けるのではなく、自然の中に入って自らが感じて学んでいってほしい。鳥の名前や花の名前などフィールドに出てカタログ的な知識を得たいという参加者が多いことも事実です。昔は我々も誰かに教えてもらったと

いうことではなく、まずは自然の中に入って姿を見て声を聴き、間違っただけで覚えていたことも「これは違ったんだな」という具合に修正しながらやってきました。本や資料は後から見ればいいし、何よりも一番は心が動くような出会いを自然の中でしてほしいんです。最近の子どもたちは忙しすぎるような気がしています。スポーツ教室や塾などに放課後の時間を割いている子どもたちが多くなっていますね。自然の中で自らが率先して遊ぶ体験が不足しているように思います。自然の中で生活させてもらっているという実体験の少ない現代の子どもたちが、大きくなってから自然に対して思いあがった人になってしまうのではないかと心配です。

**本) 太田さんが写真を通して伝えたいことは何ですか？**

太) 人の生活も自然とつながっているということです。無尽蔵に自然はあると考えている人が多いです。私たちの身の回りには自然が、本当はもう瀕死の状態にあるということに気づいていないのではないのでしょうか？あまりにも危機感を持っていない、むしろ軽視されているような事態が、地球規模で起こっているのです。



これまで太田さんが世に送り出してきた著書の数々の一部

**本) 環境のバランスが崩れているのか、動物たちが農村部や都市部に出没することによる被害が各地で起こっていますが、環境が変わってきたと感じることはありますか。**

太) 野生動物の進出は温暖化の影響もあるのでしょうか、自然林の減少が最も大きな原因ではないのでしょうか。拡大造林による影響で食べ物や住処を失った動物たちが森にすむことができず、仕方なく人の近くに出て来ているということだと思います。メディアでも野生動物の捕り物劇がニュースになりますが、出てきた動物たちが悪くなるような報道のやり方はしないでいただきたいのです。カラス被害にしても、大陸からやってくるミヤマガラスが増えているのですが、実はカラスは環境の掃除屋という意味では、大切な存在であることも忘れてはいけません。

最近感じる変化は鳥が声を出さなくなったと思います。個体数が減少したということもあるかもしれませんが、1個体自体の囀りが何らかの原因で減っているような気がしています。最近のイヌワシに関するニュースで、イヌワシのための狩場を作る取り組みが紹介されていますが、それ以前の問題ではないかと思っています。それは捕らえる対象であるエサ動物が少ないということです。クマタカがカモを食べている場面にも遭遇しました。本来のエサであるウサギやヤマドリなどの動物自体が減っているのが原因だと思います。人工林から生物の豊富な自然林へと環境を整えてやる必要があるのだと思います。ブナ林の減少によって水をためる林床が少なくなり、山から流れる水が減りました。

磯釣りをよくするのですが、鱗がはがれたのではなく、先天的にクロダイがたまに釣れます。最近ではアワビが

海底でよく死んでいるのを見かけるようになったと地元の漁師から聞きました。海底では磯焼け現象が起こって、魚たちの育つ場所、産卵の場所がなくなっている中で、稚魚の放流をしても、本質は何も解決していないということです。恐ろしいことが我々の気づかないところで進んでいるのです。

**本) 生まれ変わるとしたらどんな動物になりたいですか？**

太) 猛禽類。最高消費者で一番強いから。ただし、獲物の多いところという条件付きですがね(笑)。

**本) 太田さんの目標は何ですか？**

太) これまで自然を撮り続けてきましたが、水鳥たちの生活や水草、縄文時代から続くトチの木の恵み、ブナ帯の文化などを中心に最後の仕上げに取り掛かろうと思っています。

**本) 次の自然環境を担っていく世代に一言お願いします。**

太) やはり自然の中を何度も何度も歩いて、気づいてほしいです。そこから守っていかなければという感情が芽生えてくれればありがたいです。文献等で得た知識も大事だとは思いますが、フィールドで得た感情や思いに勝るものはないと思います。感性豊かな人になってほしいと思うのです。昔は私が写真を撮っていると、歩いている人たちは「何を撮っているんですか？」などと質問をしてくれましたが、今はそういったことを聞いてくる人たちも少なくなりました。それだけ関心が薄れているということなのでしょう。



太田さんからは、長いフィールドワークに裏打ちされた自然観と、これまでの環境保護活動で自らが矢面に立って活動してきたという現在ではあまり語られることもない貴重なお話を力強い口調でお話いただきました。日本人のルーツ縄文文化にも深い関心を持ち、自然とともに生きることを実践している太田威さんのスピリットに心が揺さぶられました。ラムサール条約湿地に限ったことではありませんが、「自然の中で生活している」ということを肝に銘じ、自然を利用する皆さんにはルールを守って影響のない利用を心掛けていただきたいと思います。そして太田さんたちが命懸けて守った自然をさらに後世に引き継いでいかなければならないと改めて感じました。

→夏から半年もの間、駆除せず事務室で共に暮らしたキイロスズメバチの巣。自然と共存するという太田さんのポリシーが感じられました。



太田威(おおた たけし)

1943年満州国生まれ。ネイチャーカメラマン。尾浦の自然を守る会会長。著書「ブナの森は緑のダム」で第9回日本科学読物賞受賞。第23回NHK東北ふるさと賞受賞。著書に「ブナの森の四季」「ブナ原生林」(共著: 串田孫一)等多数。

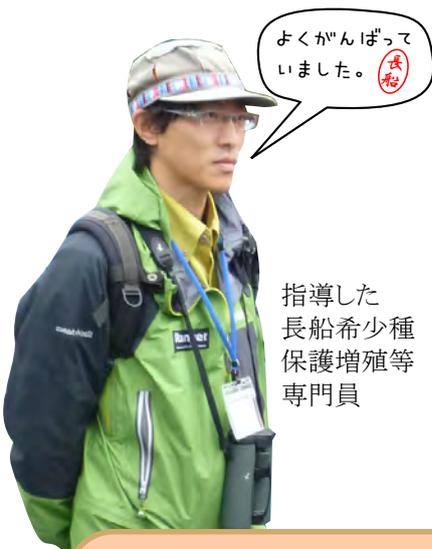
## インターンシップレポート

# 森、インターンに行ったってよ

9月下旬、約10日間にわたって岩手大学農学部より3年生の森航大さんがインターンシップに来てくれました。その活動と感想を報告してくれましたので紹介いたします。

私は猛禽類(特にイヌワシ)の保護に強い関心を持っていて、将来的にも猛禽類の保護に携わっていきたくて考えていました。鳥海イヌワシみらい館では、普及啓発の一環として観察会や勉強会などのイベントを開催しているので、私も実際にそのようなイベントのお手伝いをさせて頂き、自然保護の普及啓発活動のしくみについても深く学びたいと考えました。また、猛禽類の生態調査といったフィールドワークについても学べる点が魅力的だと感じました。特に、山形県でのイヌワシの生息状況を知りたいと思い、鳥海イヌワシみらい館でのインターンを希望しました。

### ○インターンで経験した業務内容



指導した  
長船希少種  
保護増殖等  
専門員

#### (1)観察会

タカのカウント、タカの渡りに関するメカニズムや研究事例の紹介



#### (2)イヌワシ調査

営巣地周辺・在不在の不確かな場所でのイヌワシ出現状況調査、古巣への踏査



#### (3)鳥獣保護区巡視

動植物の生息状況調査、鳥獣保護区看板周辺の整備



#### (4)オフィスワーク

観察会用缶バッジ作成、資料燻蒸、観察会打ち合わせ、モニタリング業務発注業者との打ち合わせ、資料・剥製の整理



自然保護官の業務内容については鳥海南麓自然保護官事務所の保護官が不在とのことで、同じく庄内地方にある羽黒自然保護官事務所で詳しく伺いました。オフィスワークは私も体験しましたが、想像していたより何倍も大変でした。

フィールドワークでは、山形県内の複数のイヌワシ生息地で調査できたことが良かったです。岩手に比べて原生的植生が多く残っていると感じました。イヌワシを連想させる地名が残っている場所もあり、古くからその存在が認識されていたことを実感しました。今回は葉が茂った状況での景観しか見られなかったため、落葉期・積雪期にも訪れてみたいです。

希少種保護増殖等専門員の長船裕紀さんにはバードウォッチングだけでなく、市内の里山の観察にも連れて行ってもらいました。酒田市周辺には希少な水生動物が多く生息しているということを知りました。連日、長船さんのアツい話を聞くことができよかったです。

生き物や環境教育に興味のある人、または自然保護系の行政職への就職を考えている人に鳥海イヌワシみらい館でのインターンシップをお勧めしたいです。観察会は季節によって対象とする生き物も様々なので、自分の興味のある分野の観察会と重なる日程でインターンを考えてもいいかもしれません。



森 航大さん

岩手大学農学部  
共生環境課程  
共生環境学コース

# イベント開催報告

## ○山形大学農学部「鶴寿祭2017」

11月4日(土)・5日(日)に鶴岡市にある山形大学農学部キャンパスにて開催された「鶴寿祭2017」へ出展してきました。

今回初めての出展ということもあり、展示物はイヌワシの基本を知ってもらう構成としました。山形大学農学部は、近年ニュースでも取り上げられた「産学官」連携による鳥海山でのイヌワシの狩場創出事業において研究パートを担っていることもあり、猛禽類に興味のある学生が多く、イヌワシについての質問も多く受けました。学生以外にも、鶴岡市に加え酒田市、山形市から来てくださった家族もいて、イヌワシの保護について広く知ってもらうことができましたと思います。

来場してくださった皆さん、また出展に当たって会場の準備など協力してくださった鶴寿祭実行委員の皆さんありがとうございました。



多くの来場者がありました

## ○観察会「森の王者クマタカ」

11月18日(土)は「森の王者クマタカ」と題して観察会を開催しました。講師は当館の長船裕紀希少種保護増殖等専門員に加え、特別講師として、林野庁朝日庄内森林生態系保全センター所長の相澤義継氏と、自然再生指導官の阿部進氏にもご協力いただきました。

前日までの天気予報では雨の確率が高く、当日の朝の時点ではなんとか天候がもちそうだと思っていたのですが、開会の時刻になると土砂降りとなり、室内でのプログラムに切り替えて開催することとなりました。

まず、講師の長船専門員から、スライドを使ってクマタカの生態や保護の制度について詳しく解説したのち、相澤氏より、林野庁の実施する「緑の回廊」や保安林における森林整備の取り組みについて説明していただきました。特別講師の皆さん、参加してくださった皆さんありがとうございました。



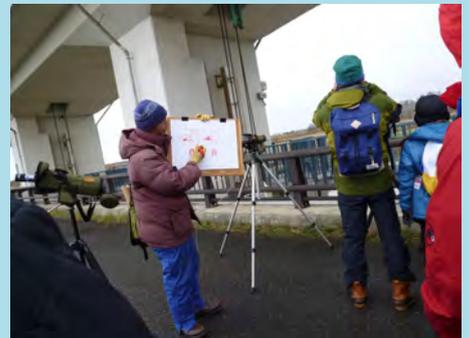
取り組みについて解説する相澤氏

## ○観察会「葦原の猛禽チュウヒ」

12月2日(土)に「葦原の猛禽チュウヒ」と題して観察会を開催しました。講師は日本野鳥の会山形県支部長の築川堅治氏です。

チュウヒのねぐら入りで戻ってくる姿を観察しようということで、午後からの開催としました。少しぐずついた天候ではありましたが、荒れることなく穏やかな天候の下で開催できました。講師によるユーモアのきいた話術で、チュウヒに加え一般鳥類についても楽しく解説していただきました。講師の築川さん、来場してくださった皆さんありがとうございました。

見られた鳥:ハイイロチュウヒ、オオタカ、ハヤブサ、トビ、ノスリ、オオバン、コガモ、カイツブリ、カワウ、ホオジロガモ、オナガガモ、ツグミ、ヒヨドリ、ハンボンガラ、カワセミ、アオゲラ、ミコアイサ、ベニマンコ、シジュウカラ、アカゲラ、カワラヒワ、オオジュリン、マガモ、ヒシクイ、アオサギ、ダイサギ、コハクチョウ 計27種



## イベント情報コーナー

### 観察会「冬のワシ・タカさがし」

期 日 平成30年2月3日(土)  
時 間 8:30~12:00  
場 所 鶴岡市大山下池 ※ラムサール条約登録湿地  
参加費 一人300円(保険代、資料代)  
講 師 宮川道雄氏(鳥獣捕護区管理員)  
持ち物 双眼鏡(貸出可)、飲み物 ※防寒着着用  
申込み 2月1日(木)までに鳥海イヌワシみらい館へ  
TEL 0234-64-4681 E-mail:moukin@raptor-c.com





# 蜂蜜の森から 第3回「蜜ろうそくは森のともしび」

山形県朝日町で蜜ろうそくの制作を通して自然のすばらしさを伝えている安藤竜二さんによるコラムのコーナー第3回目です。蜂蜜の森を通して私たちが暮らす環境を見つめなおしてみませんか？

蜜ろうそくを作り始めてまもなく30年になりますが、未だに炎が透かし出す「蜜ろう」の黄色や橙色に焦がれてしまいます。例えるなら、日差しが紅葉の葉っぱを透かし出す美しさと同じです。その絶妙な色は部屋全体もオレンジ色に染め上げ、じわじわと心にも染みはじめ私はいつも安堵な時間を手に入れることができます。優しく、暖かくて、嬉しくて、ありがたくて、ちょっと切ない、そんな感情が湧き出してくる美しさなのです。



しかし残念なことに、この蜜ろうの色は実にはかないのです。めずらしいからと包装を解いて飾ってしまえば小一ヶ月程で色がくすみ始め、半年とか一年経てば薄茶色や白っぽい色になってしまいます。最大の原因は紫外線です。太陽の光はもちろん電気照明すらも色を破壊します。悲しいことに包装しているものも半年も経てば褪色が始まります。儂い色だからこそさらに愛おしく感じるのかもしれませんが。また、愛おしく感じる理由はほかにもあります。

蜜ろうは100%ミツバチの巣です。三代目を継ぐ私の弟は200群を持つ大規模養蜂家。初夏の採蜜期は私も手伝い、収穫した巣はありがたくいただきます。ハチミツは一群から年間50kg以上も収穫できますが蜜ろうはたったの500g程しか採れません。私は地元朝日連峰や月山をはじめ、八幡平や白神山系など東北各地の養蜂家仲間からも仕入れ製造しています。

収穫する巣は採蜜時に切り取る「蜜蓋(みつぶた)」が主となります。これは蜜が巣穴に満タンになると、保存のため密封する蓋のことです。巣枠からはみ出して作られた「ムダ巣」も大切に収穫します。家に戻るとすぐにお湯で煮て最初の精製を行います。ムダ巣には幼虫が入っている場合もあるので、腐る前に取り除く必要があるのです。また

巣そのものにはカビも生えますし、巣虫と呼ぶガの幼虫が食い荒らし排泄臭をつけることもあります。

お湯で洗われた巣は一晩経てば分離し、浮かんで固まった蜜ろうだけを取り出すことができます。色が凝縮され、初めて鮮やかな黄色や橙色を見ることができます。

製造を始めたころ「蜜ろうの色は、花粉の色が表れる」と、玉川大学ミツバチ研究施設の教授に教わりました。ミツバチはハチミツを食べて体内で「ろう」に変化させ、腹部から分泌し巣材とします。その食べるハチミツの中に溶け込んでいる花粉の色が蜜ろうの色として表れるのだそうです。



蜜蓋を切り落とすと巣盤から蜜があふれ出す(左) 植物によって巣の色が違う(右)

たしかに森の中で最も多くのハチミツをもたらすトチノキの花粉は濃い橙色をし、その季節の巣は薄橙色です。そして蜜ろうはきれいな橙色になります。同じように黄色の花粉のキハダの季節は、黄色の蜜ろうになります。蜜ろうの色は蜜源植物がもたらした天然色なのです。

そしてさらに驚くことがあります。1匹のミツバチは、一生働いても小さじ一杯のハチミツしか集められませんが、蜜ろうはさらにミツバチが食べた量のたった10分の1程しか分泌できないのだそうです。

蜜ろうそくのともしびは、小さな命のミツバチがもたらした「森のともしび」なのです。(文・安藤竜二)



安藤竜二  
1964年生まれ。養蜂を学んだ後1988年に、日本ではじめての蜜ろうソック製造に着手。ハチミツの森キャンドル代表。日本エコミュージアム研究会理事。山形県養蜂協会監事。編著『朝日岳山麓養蜂の営み』(朝日町エコミュージアム研究会発行)



Illustrated by Masami Tsuno

©鳥海イヌワシみらい館

## 普及啓発担当

酉年も終わって戌年ですが、「イヌ」ワシということで、よろしくお願ひします。(本)

## 事務局

ラニーニャ現象に怯えています。凍結道路が恐怖!! 春よ早く来い・来い・来い♪ (村)

## 希少種保護増殖等専門員

そろそろイヌワシの産卵ですね。爆弾低気圧による暴風が心配の種です。(長)

## 編集後記&施設情報

### 鳥海イヌワシみらい館 1月~3月の開館情報

開館時間・・・9:00~16:30

入館料・・・無料

休館日・・・1~2月(土、日、祝、火) 3月(火)

臨時休館日はホームページにてお知らせします。

ホームページアドレス : <http://www.raptor-c.com/>

<https://www.facebook.com/Raptoreagleraptor>

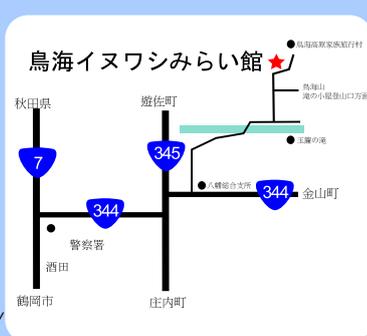
## 猛禽類保護センター

〒999-8207

山形県酒田市草津湯ノ台71-1

TEL 0234-64-4681 FAX 0234-64-4683

E-mail: [moukin@raptor-c.com](mailto:moukin@raptor-c.com)



## 鳥海イヌワシみらい館通信

Vol.25 新年号

発行: 猛禽類保護センター活用協議会  
(事務局 鳥海イヌワシみらい館内)